

「生きることの意味」(ローマ一四章七〜九節)

1 キリスト教学校

今日は、私たちの教会がキリスト教学校の日と定めている、向こう一ヶ月間の、始まりの日曜日です。

この期間、できるだけ多くの学生、生徒さんに来ていただき、教会のことを知ってもらいたいと思っています。また学校のため、そこで学ぶ若い人たちのため祈る時としています。礼拝の後、ご案内のように、尚綱学院中高合唱部の皆さんによるコンサートもあります。

キリスト教学校は、大学も中高も、どこも歴史の古い学校が多く、これまでたくさんの人材を生み育ててきたことはいままでもありません。一番古い学校は明治学院です(文久三年、一八六三年。明治維新の五年前)。在仙の学校もみな古く、また仙台にはカトリックもふくめキリスト教学校が多く、直接間接の影響を、この町の暮らしに、あるいは文化に及ぼしています。生活に落ち着きと豊かさをもたらしてくれているようにも思います。

キリスト教学校のその「キリスト教」というのが学校のどこにあるか、どこで確保されるかという点、私はいま教会の牧師としてというより、かつてキリスト教学校に奉職した者として申し上げれば、それはもちろん建学の精神というものにあるのでしようけれど、具体的には、学校礼拝、聖書の授業、そして入学式や卒業式の諸行事がキリスト教でおこなわれるというところにあります。もっと個別的なこととして、ここで働く教職員の皆さんの学生、生徒たちとの誠実な関わりにあるということもできると思います。これは小さなことではありません。

キリスト教(主義の)学校は、私のこれまでの経験からしても、生徒一人ひとりを大切にするという点で、どんな教育機関にもひけをとらない。ですからいま学んでいる学生さん、生徒さんもその点では本当に信頼して、安心して学びつづけていけば間違いないと思います。

生徒一人一人を大切に、一般の公立の中高や、他の宗教、他の理念に基づく学校がそうでないということでは、むしろ決してありませんけれど、そうした学生、生徒一人一人を大切にするのは、私の印象では、キリスト教学校に共通したもつとも大きな特色といってもよいと思います。

それではこうした共通の特色はどこから来るのだろうか、それを考えると、私にはキリスト教の人間観というところに行き着くように思われます。そこから来ている。学校にいる人も、外から見ている人も、それほど思わないかもしれませんが、それが根底に息づいているように思うのです。

キリスト教の人間観などという点と何かとても難しいように思われるかも知れませんが、聖書の人間観、聖書は人間をどう見ているかということです。別の言い方をすれば、イエス・キリストにおいて真の人間性の実現されている、見出されるところの人間観です。これが根っこにあって、他の学校にはない、他の学校との違いをもたらしている大きな要素のように思います。

2 人間とは

そこで今日は、聖書が人間をどう見ているか、どう捉えているか、全部ではないけれど、その大切ないくつかのことを申し上げてみたいと思います。聖書の人間観です。

聖書の人間観といえば、私たちが真つ先に思い起こすのは、聖書の一番はじめにある文書、創世記に書いてある、人間は神によって造られたということではないでしょうか。神は創造の第六の日に、哺乳類などの動物の創造と同じに日に、人間を造ったと書いてあります。

しかも重要なのは、そのさい人間が神様に似せて、あるいはかたどって造られたことです。

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された（創世記一・二七）。

つまり人間は、人間であるかぎり、だれもが、一人ひとり、神様を写すようにして造られたということです。

なるほど人間は一人ひとり違います。顔も形も、考え方も感じ方も、生まれた国も違うかも知れません。しかし聖書によれば、それらは人間を決めてしまう要素ではないのです。むしろ一人ひとりが神様の写しである、そこに人間の本質があり、そこに一人ひとりの尊厳、かけがえのなさがあるのです。それが、一人ひとりが大切にされる、それがあっていして尊重される、教会でも、キリスト教学校でも、その根底に息づいているものだと思います。

この写しとは何でしょうか。神様がもっていて、人間もつことを許されたものは何でしょうか。じつは昔からいろいろ考えられてきたのです。しかしそれが何であっても、少なくともこういうことはできません。人間は神様のもっているものと同じものをもっている。共通のものをもっている。つながっている。そうすると、そこには関係ができていくということです。交わりができる、もつといえれば対話できる、祈ることができるといことです。神様と関わり、対話することができるといこと、それが神の写しをもって人が造られたということの意味です。

その関係は神様とのあいだだけでありません。人間はみな神の写しをもって造られたのです。ということは、人はお互いにつながっている、交わりの中に、関わりの中に、対話しつつ生きることが出来るということです。日本語でも人の間と書いて人間です。先ほど読んだ創世記の一節の最後のところに、さりげなく「男と女に創造された」とありました。つい読み落としてしまうフレーズですが、「男と女に」、これこそ、人間が、互いの間で、対話し、助け合い、共に生きるように造られたということ、もつとも象徴的な言葉をもって語っているのです。

さてもう一つ、聖書の人間観に関わることを申し上げたいと思います。いま人間は神様を写しをもっていると申しました。しかしそれならどうして人間は悪いことを考えたり、他人を傷つけたり、殺めたり、国と国どうしが戦争をしたり、仲良くなれな

いのでしょうか。

じつは聖書は、人間を先ほど人は神様に造られたといったときのような、いわば最初の、無垢な、理想の姿において見ているだけではありません。聖書の人間観はきわめて現実的なのです。どんな人間観よりも現実的です。問題は現実です。人間が罪に陥っている、悪に染まっていることを見つめているのです。使徒パウロの書いた新約聖書のローマの信徒への手紙にこうあります。

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより、無償で義とされるのです（ローマ三・二三～二四）。

人は皆罪を犯した。こうした現実を聖書は見つめます。しかし聖書は、この現実をそれより大きい、もう一つの現実と一緒に見つめています。イエス・キリストによって、その十字架による罪の贖いによって、私たちを、私たちの罪の現実から救ってくださったという現実とともに見つめます。このもう一つの現実の中で私たちの罪の現実はおおわれ、きよめられます。

でもなぜこの私の罪の現実をおおってくださったのだろうか？ そのような救いにあずかる資格はどうしていないのに。しかし、事実そうなのです。それがどのような人間であろうが、その人のためにイエス・キリストは死んだのです。私のために、私たちのために。彼のために、彼らのために。キリストが我知らず自分のために死んでくださったということ、これ以上に私たちが神にとって大事な存在だという証しはないのではないのでしょうか。

一人ひとりかけがえのない人として造られた、その一人ひとりを神は愛して、そのために御子を遣わした、こうした人間観、こうしたものの上に、キリストの名において建てられた学校、教会は存在しているのです。

3 生きるも死ぬも主キリストのため

キリスト教学校、そして教会、その根底にある聖書の人間観を少し申し上げてみました。神との関わりにおいて、人と共に生きるように人間は造られたということ、そして私たちがどんなに欠け多く罪深い人間であっても、私たちのほうが神との絆を断ち切っても神は断ち切らないということ、私たちが愛しておられるということ、御自分の所有としてくださること、そういつたことを申し上げました。

その上でもう一つのこと、新約聖書の今日の聖書箇所^{箇所}に教えられているもう一つのことを申し上げたいと思います。今日の箇所の真ん中あたり、次のような言葉があります。

生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです（八節後半）。

主というのは、ここでは、主イエス・キリストです。生きるにしても、死ぬにして

も、わたしたちは主のものです。これは使徒パウロが自分の信じることを率直に言い表したものです。

私たちの生と死、私のからだも私の心も、私の人生の全部が、私のものではなく救い主イエス・キリストのものだと告白しているのです。私の人生は私のもの、だからどう生きようと自分の自由、自分の勝手というのではないのです。

人間は造られたと申しました。造られたのであって、人間は自分が自分の命の源ではないのです。造られたのは目的があつて造られたのです。神は私の人生において、またこれを通して何をなそうとしておられるのだろうか。自分がしたいことを、なりたいたいのを考えることも大切ですが、神において自分の人生を考えることも大切です。そのことをまとめて今日の聖書はこういつています。

わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです（八節前半）。

少し話しは変わりますが、尚綱学院の方は、アンネー・ブゼル先生（1866-1936）のことは、もちろんよく知っていると思います。一八九二（明治二五）年、二六歳で来日し、二七年の長きにわたって在職して尚綱学院の基礎をつくった米国の女性の宣教師です。名前は私もよく知っていましたが、この教会の牧師になってから、少し詳しく知るようになりました。でもまだ勉強中です。

このブゼル先生の胸像が遠野教会にあつて、そこに刻まれた聖書の言葉が、とても印象に残っています。それは、

然れど我は汝等の中にて事ふる者の如し（しかし、わたしはあなたがたの中で、給仕をする者のようにしている）（ルカ二二・二七）。

胸像の台座に刻まれた聖句はもとも遠野の教会付属施設の食堂に掲げられていた聖句です。ブゼル先生は、尚綱をおやめになったあと、一九二〇（大正九）年に岩手県遠野町に伝道をし、幼稚園をつくり、地域の教育に尽し、一九三六（昭和一一）年に仙台で亡くなるまで人生の全部を献げられたのです。

だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいない。人は生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬ。自分のための生き死にではなく、神のための生き死に、自分の人生において神様の栄光があらわれるように、それに仕える、その時、神に造られた、神に愛された人間の生きる道が新しく開かれてくるはずです。ブゼル先生自身が身をもって示されたように。このキリストにある生きる意味を、いろいろの形で伝える、それが教会の、またとりわけキリスト教学校の変わらない使命なのです。

（二〇一九・七・二八）